



浜松と工芸とアート：表現者たちの想いと浜松との関わり

現代の浜松には、工芸とアートの関わりがどれだけあるのでしょうか？

私は日頃、お店を通じて文化的なモノに対する関心があり、その文化を自覚的に支えようとする方々と多く出会います。その一方、生活に溶け込むように、表現そのものにふれる機会がもっと増えて欲しいとも感じています。そこで今回は浜松でうつわのギャラリーを運営するRohan鈴木林太郎が、浜松を拠点に活動する作家2名に取材させて頂きました。

ガラス作家 栗原瑠璃華さん

天竜区の自然豊かな場所で工芸のガラス作品を製作する栗原さん。

普段、どのようなことを感じて作品製作をしているのか、工芸やアートに対する距離感、今後の展望、浜松に期待するところなどを率直に語って頂きました。

ー作品製作について何か基準のようなものはありますか？

私は美大などで学んだわけではないですが、これまで培ってきた美の基準は日本画家である父の影響を受けて育ったことが大きいと思います。そのため、どんな作品を創ろうか、イメージを膨らませるときに日本画のような色彩感覚がベースとなって表現しています。

特にガラスは日本画と似ていて、日本画の画材が岩絵具などの鉱物であるように、ガラスの着色もサファイアなどの鉱物を使用するので、色合いや色の重なりのアプローチがすごく似ていると思います。子どもの頃から絵画など観賞用の作品を観て育ったこともあり、生活のなかに取り入れる器のことを知ったのは、実はずっと後のことなんです。

ー私は日本画というと美術の世界をイメージするのですが、現代アートや工芸について、どんなイメージや距離感を持っていますか？

日本画だけでなく、抽象画などは馴染みがあるのですが、現代アートはあまりふれていないですね。私自身、作品を使ってもらいたいという思いが強いので、やはり工芸が自分に一番近いと思います。ひとつの器のなかに景色を創ることや装飾性も意識しています。またガラスならではの魅力として、光を通して映る影のフォルムにもこだわりを持っています。

ー浜松で育つかで工芸は身近にありましたか？

実は工芸は全然身近ではなかったです。ガラスの勉強をするなかで、それこそ勢いで工房を作ったのですが、最初はアルバイトをしながらガラス作品を製作して展覧会をしていました。また



木工作家 柏原崇之さん

浜名湖北岸の広い空と湖畔を望む場所で、木と対話するように作品製作をする木工作家の柏原さん。普段、どのようなことを感じて作品を生み出しているのか、工芸やアートに対する距離感、今後の展望、浜松に期待するところなどを率直に語って頂きました。

ー作品製作について何か基準のようなものはありますか？

東京藝大先端芸術科に進学したのですが、入学当初は実在する彫刻に惹かれていました。

学生時代は彫刻には立体を動かす表現として、コマ撮りアニメーションを製作しており、特にヤン・シュヴァンクマイエルの作品が好きで、それは手仕事というか、どこかアナログな要素が残る表現に惹かれたのだと思います。それが創作する上で大切な原点であり、基準なのかもしれません。

ーでは木工との出会いはいつ頃ですか？

大学卒業後、進路を模索するなかで興味を持ったのが、電車の車窓から流れていく人々に人が住んでいて、それぞれの暮らしもある、ということでした。それを実際に身体で知りたいと思い、当時、住んでいた東京から実家のある河西市まで歩くことにしたんです。季節は7月下旬の真夏のことで、多分、12日間ぐらいかけて帰ったと思います。その道中、静岡県内の国道を歩きながら、少し休憩する場所を探していたら、住宅街のなかに高い木が生えている場所があり、そこは神社でした。その境内に入った瞬間、静寂に包まれた空間が広がりました。樹齢何百年かの大木があり、その大木の隆起した根っこに座ってみると、心からほっとしたことを覚えています。このとき、自分の頭のなかに「座る」という意識が浮かび、そこから椅子に興味を抱きました。それが木工と出会いきっかけですね。この体験から家具製作を学ぶことにしました。

ー身体で木を感じるきっかけがあったんですね。では木工との向き合い方など、大切にしていることはありますか？

意識していることは、洗練されすぎないことです。家具の世界に入って、木材の経験値がふえるなかで、本来は捨てられてしまう木材が持つ個性に魅力を感じました。それはプリミティブな要素というか、今後どんなに技術が進歩した世界であっても、きっと残るであろう手仕事とは何か、そんなことを日々考えようになりました。たとえば手のひらで掬った



ときに、こぼれ落ちたものを掬いたい、そんな感覚があります。

ー柏原さんの哲学を感じますね。では現代アートや工芸について、どんなイメージや距離感を持っていますか？

普段、特に意識しているわけではなくて、作品を自分で生み出すこと、自分で愛でるものを作りたいと思っています。そのため、現代アートや工芸の少し外側に自分の作品があるかもしれません。たとえば土器は、売るために作られた商品とは異なる独特な魅力があると思います。そんな土器のような作品を作り、それが誰かの手に渡り、その人の家や生活を灯すことが出来たら嬉しいですね。

ー河西市で育つかで工芸やアートは身近にありましたか？

生活のなかで工芸やアートの関わりを感じたことはあまりないかもしれません。むしろ、それを根付かせたいと思って定期的にワークショップをしたり、保育園の什器を作ったりしています。そのなかで、表現に興味がある人が一定数いることも感じています。

ー最後に浜松に期待することはありますか？

一番思うことは底上げです。文化的に人が集まり、心が豊かになるものが生まれる場所が増えていくと、もっと浜松が面白くなるのかなと思います。(取材:Rohan 鈴木林太郎)



おわりに

そもそも浜松には、海や山や湖など、自然の多彩な景色がひろがり、さまざまなインスピレーションを与えてくれる豊かな土地があります。個人的には、浜松のまちなかで工芸やアート作品と出会う機会がもっと増えていくと、さらに歩くことが楽しい文化的な都市になるように思います。

今回対談させて頂いた2人の異なる作家の視点を通じて、浜松と工芸とアートの関わりがさらに深まる機会となれば嬉しいです。

「しだんくら」～中山間地域から芸術発信を目指す～

代表 山本裕司

■しだんくらとは

「しだんくら」は浜松市北区引佐町渋川に拠点を置く音楽スタジオ・美術ギャラリーです。渋川という山奥に「何で文化施設を作るの?」とビックリ仰天だと思いますが、これもコロナ禍から学んだ発想です。地元浜松はもちろん、新東名を利用して首都圏・名古屋エリアからの利用を視野に入れ、より多くの方に芸術活動や浜松の豊かな自然、音楽の街としての魅力を微力ながら発信していくと考えています。



■音楽スタジオの特徴

2つの施設からなり、リハーサルやレコーディングを高品質な機材・設備で行うことができます。自然の中で、ゆったりとストレス無く音楽に集中できる場となっています。

■美術ギャラリー展覧会情報

手作り感満載のギャラリーですが、2024年2月10日(土)～3月27日(水)静岡県立美術館で行われる「天地耕作～初源への道行き」展とタイアップして「しだんくら～共時する中世」展を開催します。音楽スタジオご利用の際にはぜひ御覧下さい。(「天地耕作」は山本裕司と村上誠・渉兄弟が浜松を中心に野外で行った美術プロジェクトです。)



今号の表紙



大塚敬太 profile

1986年、浜松市生まれ。

武蔵野美術大学 造形学部映像学科 卒業、東京藝術大学 大学院映像研究科 メディア映像学科 修了。

2020年、浜松にUターン移住。現在は東京工芸大学 芸術学部 写真学科の非常勤講師を務める。

作品制作にあたって

自然科学と写真術の関係を主なテーマとして制作をしています。

子どもの頃から、ものづくりや絵を描くことに関心を持っていましたが、鉱物や化石の図鑑や、顕微鏡や天体望遠鏡で撮影した写真などを眺めることも好きでした。人の手では作ることが到底叶わないような見事な自然の造形や、肉眼で見ることが難しい天体やミクロの世界のイメージに惹かれていたのだと思います。これらの関心が、現在の制作活動につながっていると考えています。

今回はサイアナタイプという古典的な写真技法で制作していますが、オーソドックスな使い方からは外れた方法で制作しています。詳細はここには書ききれませんが、実験をするような気持ちで試行錯誤しながら制作しています。子どもの頃に夢中になったものに対する、現在の私からの応答のような作品だと捉えています。

制作者

大塚敬太
(写真家)